

聖書：ローマ 1：5～7

説教題：信仰の従順

日時：2015年3月8日

先週からローマ人への手紙を学び始めています。今日の5～7節も前回は引き続き、冒頭のあいさつの部分の一部です。本来1節の「神の福音のために選び分けられ、使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロから」と始まって、7節の「ローマにいるすべての、神に愛されている人々、召された聖徒たちへ」と続くはずですが、パウロはこの書のテーマである「神の福音」という言葉に触れた途端に脱線して、神の福音についていくつかのコメントをしています。前回見たことは、この福音は旧約聖書と一致して「神の御子に関するもの」だということでした。すなわち三位一体の第二人格なる子なる神が、ご自身をへりくだらせて歴史のある時点で人となって誕生し、十字架の死に至るまでの低い生涯を歩み、復活して天に昇り、今や力ある神の子として聖霊を通して働いておられる。まさにここに福音のすべてがあるということでした。

今日はこの主イエス・キリストからパウロが使徒の務めを受けたというところから始まります。5節前半：「このキリストによって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。」パウロが言わんとしていることは、自分は「使徒の務めを受けた」ということです。しかし彼はそれだけを言うことができませんでした。これはただ一方的な神の恵みによることなので、彼は「使徒の務め」と言うより先に「恵み」と言わざるを得なかったのです。ご存知の通り、以前のパウロはキリスト教会の迫害者でした。主の弟子を見つけ次第縛りあげて牢にぶち込んだり、さんざんのひどい仕打ちをしました。その彼はさらにキリスト者を迫害するためにダマスコまで追いかけて行く途上で、復活の主に出会います。そこで彼は自分が今まで間違った熱心によって取り返しがつかないようなことをして来たことと知り、愕然とします。しかし復活の主イエスは彼を滅ぼさなかつたばかりか、彼を救いに導き、さらには神の国建設のために働く器としてくださいました。そのことを思う時に、パウロはただ「使徒の務め」とだけ言うことはできず、「恵み」と「使徒の務め」と言わざるを得なかったのです。これは私たちにもまた当てはまることでしょう。私たちも自分の罪のゆえに本来は直ちに滅ぼされてもおかしくない者たちでした。そんな私たちがさばきを免れ、天国に住む者とさせられたことは大いなる恵みですが、神はさらに神の国を共に建て上げる者になるようにと一人一人に賜物と役割を与えてくださっています。私たちもそのことをまず「恵み」として心から感謝することが大切でしょう。たとえば長老に召された人は、私は「恵みと長老の務めを受けました」。執事に選ばれた人は、私は「恵みと執事の務めを受けました」。教会学校の教師として奉仕する人は、私は「恵みとCS教師の務めを受けました」。また「恵みとシオン会役員の務めを受けました」。他にもたくさんの働きがあります。一人一人は必ず何らかの賜物を与えられていて、それをもって神の国のために貢献できる者とされています。もちろんそこには多くの労苦もあるでしょう。しかし

そのあまり、まるで嫌な仕事を引き受けるかのような態度であってはならない。主がご自身の永遠の御国のために私たちを召してくださいなら、それは大いなる恵みです。ですから私たちもパウロのように「恵みとこの務めを」、「恵みとこの奉仕を」と告白し、感謝するところから、喜びに満ちた奉仕をささげる者でありたいと思わされます。

さて、このパウロの務めには目的がありました。3つの目的を彼は5節で述べています。第一は「あらゆる国の人々の中に」ということです。パウロは特に異邦人宣教の器として召されました。彼自身はユダヤ人であり、同胞に対する特別の愛を生涯持ち続けましたが、主から与えられたこの特別の召命を忘れませんでした。あらゆる国の人々に福音を伝えるという使命に彼は忠実に歩んだのです。

2つ目の目的は「信仰の従順をもたらす」ということです。この言葉はこの手紙の最後の16章25～26節にも出て来て強調されています。「私の福音とイエス・キリストの宣教によって、すなわち、世々に渡って長い間隠されていたが、今や現されて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人々に知らされた、云々」と。

まず「従順」という言葉に注目したいと思います。パウロはあらゆる国の人々に福音を伝えていました。その福音に接した人が示すべき反応として私たちが考えるのは、やはり「信じる」ということでしょう。この手紙でも「信仰による義」が大切な教理として語られます。ですからここでも「あらゆる国の人々に信仰の従順をもたらす」ではなく、「信仰をもたらす」と言っても良かったのではないかと、その方がすっきりするのではないかと、思うかもしれません。しかしパウロがここで「信仰」ではなく、「信仰の従順」と言ったのはなぜでしょうか。それはイエス・キリストを信じることはイエス・キリストに従うことだということをはっきりさせるためでしょう。信仰とは従順なのです。信仰は必ず服従の生活に現れるのです。従う生活なしの信仰はないのです。もしかすると私たちは「信じること」を知的なことのみとし、「従うこと」と区別しているかもしれません。「私はイエス様を信じてはいます。しかしまだちゃんとは従っていません。」という状態があるかのように。しかしそういう信仰はない！ということ。もしそうなら、それは信じていることにはならないということ。です。

私たちは「従う」という言葉に不自由なイメージを感じ、嫌うかもしれません。そして誰かに従うのではなく、自分が主である生活をしたいと考えるかもしれません。しかしそれは私たちがエデンの園におけるアダムの罪を引き継いでいることのある確かな証拠です。アダムとエバは自分自身が神のようにになりたい、自分が主でありたいと考えて、神に従う生活を捨てました。そこで彼らは自由を得たでしょうか。かえって反対の不自由の中に落ちました。魚は自由になりたいと言って水の外に出たら死んでしまいます。魚は魚に定められた水の中という領域にある時に最も自由で、自分らしく生きることができます。列車もレールの上に乗っている時が最も自由です。2本の軌道の上に乗っかっているだけではつまらないと言って、そこから外れてしまったら、もはや走れるどころではありません。恐

るべき不自由と困難を経験するのみです。同じように私たちも、私たちを造ってくださった神との関係の中で神に従う歩みをする時に、そのように造られた者としての自由と喜びを最も良く味わって生きることができるのです。

そしてここで私たちが従うようにとされているのは誰でしょうか。それは4節に出て来た、私たちの主イエス・キリストです。私たちのために天の栄光を捨てて降りて来られ、私たちの代わりに十字架上で尊い命まで捨てて私たちの救いを勝ち取って下ったお方。ですからこのお方を信じますと言うなら、私たちはこの方の言われることなら留保なしに従う者でなくてはなりません。私はイエス様を信じますが、この教えとこの命令にだけは従えません、というようなことがあってはならない。それは信仰ではありません。信仰は従順です。パウロの福音がもたらすものは「信仰の従順」なのです。

しかしこの言葉には、今述べたことに加えて、もう一つの側面もあります。それは従順は信仰から導かれるものであるということです。新共同訳はここを「信仰による従順」と訳し、NIVも「信仰から来る従順」と訳しています。私たちは聖書の中に様々な命令や戒めを聞きます。その中には厳しい、難しいと感じるものもたくさんあります。「自分の敵を愛しなさい」とか、「あなたがたは天の父が完全であるように、完全でありなさい」など。私たちはそれらに接して、とても私には無理、従えない!と思うものです。しかしここに「信仰の従順」とあります。すなわち従う歩みは「信仰を通して」導かれる。自分の生まれながらの力によってではなく、主イエスを信じ、この方と結ばれるところから与えられる力によって。ですから私たちは聖書の中に難しい命令だと思う御言葉があった場合、これは自分には無理と切り捨てたり、暗い顔をしてうつむくのではなく、これもまたイエス・キリストにあって私にできることとして命じられているのだ!と上を仰ぐべきなのです。まずイエス様をしっかり見る、その方に信頼し、祈り、より頼むこと。そこから従順の歩みが導かれるのです。そしてそのような従順だけが価値あるものです。人間の力によるうわべだけの従順には価値がありません。「信仰の従順」だけが神の前に尊いのです。

さて、このような信仰の従順はさらなる目的とつながっていることが示されています。三つ目にパウロが語っていることは、「御名のために」ということです。すなわち主の栄光のためということです。ここに聖書が一貫して述べている私たちのあらゆる活動の動機が述べられています。それは人間中心ではなく神中心の思想です。これは決して神がご自身の栄光を求めて、私たち人間を犠牲にするとか踏み台にするということではありません。なぜなら神の栄光は私たち人間の救いにおいて現わされるからです。私たちのような罪人が救われて喜んで神の御心に従い、神のかたちに造られた者としての性質を取り戻し、益々神を映し出す者に変えられて行くというミラクルの内に栄光を現わされるからです。その恵みにあずかった私たちは、なお自分のために関心を集中して歩むのではなく、神にこそすべての栄光が帰されるように歩むのです。Iコリント10章31節:「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすために

しなさい。」

ここから思われることは、私たちは「信仰の従順」という歩みへ召されていますが、それが最終目的ではないということです。私たちは自分のためにだけ、今の人生を生きているのではないのです。この私を通して主の栄光が現わされるという人生を神は用意しておられるのです。そのことに私たちは益々恐れおののいて、日々の生活を改めてとらえ直すべきではないでしょうか。そのような器となれるように日々祈り、この目標を見据えて、私のすることすべてがこの主の栄光を現わすことに至るように、と。その時に、ウェストミンスター小教理問答問1が述べているように「神の栄光を現わし、神を永遠に喜ぶ」という最も幸いで祝福された人生を歩むことができるのです。

こうしてパウロはやっと手紙の宛先人たちのことを記すことへと戻って来ます。6～7節前半：「あなたがたも、それらの人々の中にあつて、イエス・キリストによって召された人々です。——このパウロから、ローマにいるすべての、神に愛されている人々、召された聖徒たちへ。」ここにローマのクリスチャンたちのことが「神に愛されている人々」「召された人々」「聖徒たち」の三つの言葉で表されています。一つ一つに豊かな意味がありますが、時間の関係上、簡単に述べるにとどめたいと思います。一つ目の「神に愛されている人々」というのは、彼らの救いはただ神の愛から始まったことを意味します。私たちが神を愛したのではなく、まず神が私たちを愛してくださった。二つ目の「召し」は、救いへ導く神の断固たる行動を指します。ローマのクリスチャンたちが信仰を持っていたのは、彼らが神を選び取ったからではなく、神が召してくださったからです。私たちの信仰は、私たちの決心や志に起源を持つのではなく、神の召すという行為にすべてを負っています。そして神によって私の信仰生活が始まったなら、神によって私の救いは最後まで導かれることをこれは意味します。そして三つ目に「聖徒たち」。この「聖」という言葉の第一の意味は「取り分ける」「区別する」というものです。クリスチャンとは世から神へと取り分けられ、聖別された人たちです。そしてそのような者として同時にきよめる神の働きにもあずかっています。完全なきよめは将来天国に入る時に実現しますが、しかしキリストに結ばれて私たちはすでに根本的な聖めを受けていると聖書は語っています。そのことを認めて感謝することが大事です。そしてそこから最後の完全に聖められた状態へ向かう歩みがあるのです。

最後7節後半でパウロは祝福します。「私たちの父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安があなたがたの上にありますように。」恵みとは受けるに値しない者に注がれる神の愛顧のことです。私たちは自分を見てため息をつくような者であるなら、いやそのような者であるからこそ、「恵みを！」と祈り求めて良いのです。二つ目の平安とは何でしょうか。聖書言語において「平安」と「平和」は同じ言葉で、これは第一に神との平和を意味します。罪の問題を解決していただいて、神との間に正しい関係、平和の関係をいただくことです。それによって私たちは真の平安、神の平安を心に持つことができます。私たちは毎日、平安を持って歩んでいるでしょうか。このこと一つを考えただけでも、日々

この祈りを私たちは必要としていることが分かります。自分自身が弱く、自分に幻滅している時、また心に平安がない時、私たちはこの「恵みと平安が神とキリストから来ますように」と祈ることができるのです。そしてこれを実際に祈るなら、私たちの日々の生活にはどんなに大きな希望の世界が開かれて来ることでしょう。

パウロはこの挨拶に続いて、いよいよ神の福音をこの書で丁寧に語ってくれます。これは私たちに信仰の従順をもたらすためのものです。私たちは改めてこの福音の前で、自らの信仰を確認し、整えられたいと思います。果たして私の信仰は服従の歩みに現れているだろうか。条件を付けずに主に従う生活をささげているだろうか。そして同時にその従順の生活へと私たちを導くのは主への信仰です。主を見つめ、正しくより頼むところに、主に従うという最も幸いな道に行く秘訣があるのです。このローマ書の福音によって、その歩みが導かれるように。そのために日々恵みと平安を祈る者であるように。そしてこの私がするすべての歩みを通して、私たちの愛する主の栄光が現わされて行くという光栄ある歩みを導かれて行きたく思います。